カンヴァスの柩

山田詠美

新潮文庫

カンヴァスの柩（ひつぎ）

新潮文庫　や-34-1

平成二年八月十五日　印刷
平成二年八月二十五日　発行

著者　山田（やまだ）詠美（えいみ）
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部（〇三）二六六—五一一一
編集部（〇三）二六六—五四四〇
振替東京四—八〇八番
価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社　製本・株式会社植木製本所
© Eimi Yamada 1987 Printed in Japan

ISBN4-10-103611-X C0193

新潮文庫

カンヴァスの柩

目次

オニオンブレス……七
BAD MAMA JAMA……三七
カンヴァスの柩……九七
モノローグ〈エレガントな野生児〉……一五八
解説　藤堂志津子

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

カンヴァスの柩（ひつぎ）

オニオンブレス

1

「あの人の臭い息には我慢が出来ない。誰か私を助けて」

シドニーがこの落書きを見付けたのは、クラブ・エクスタシーガレージ。紳士用のトイレットを使おうとした時、扉の内側から聞こえて来る女の腐ったような甘い溜息に辟易し、隣の淑女用に入り込み、パンツのジッパーを降ろして気持良く放尿していた最中だった。

あいつのくそディックはこんなふうという図解や、シーラはやりまくりなどという派手な落書きに混じって、それは、とても控え目に壁の隅に鉛筆で書かれていた。シドニーは、めかし込んだ女たちの書く、あまりに大胆な落書きに恐れをなして身震いをしたが、興味深くて、すべてを読んだ。そして彼は、そのたよりない走り書きを見たのだ。気持の良い放尿が終わりに近づく時の少しのせつなさと共に。

「君を助けたら、僕のことも助けてくれる？」

彼は色褪せたグレイの上着の内ポケットからボールポイントペンを捜し出し、壁に最初試し書きをした。インクが出るようになったのを確認して、彼は女の落書きの下に、さらにそれより頼りない字でそう書いた。そして、今となっては会話となった、つつましい文字たち

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

を見詰める。感慨深げに。それは、ちょっとした感動を彼の心に呼び起こした。彼の心がそよいだのは、ずい分と久しぶりだった。彼は満足そうに立ちつくし、便器の水を流すのも忘れていた。やがて乱暴にドアを叩く音が聞こえて、シドニーは、自分が婦人用トイレットにこもっていたのに気付いた。案の定、ドアを開けると、髪にビーズを沢山つけた女が彼を大声でののしった。あの女じゃあないな。彼は根拠もなく確信を持った。そして自分と久しぶりの会話をかわした女に思いをはせた。

エクスタシーガレージはいつも騒々しかった。シドニーは、ここの場所に足を踏み入れるたびに、霧のように渦を巻く煙草のけむりや周囲の喧噪のために頭痛を感じた。激しい頭痛を吸い込ませようと、彼は手の甲を額に当てながら、バーのカウンターに席をとり、タンカレイのソーダ割りを飲み続けた。そうしているうちに彼の頭痛は体じゅうに散らばり、痛みの芯にあった孤独は正体を現わし始めるのだった。それを傷つけないように弄びながら、彼は人々を見た。

下町の男たちは趣味の悪いドレスドアップをしながらも粋に見せたくて、クールのパッケージを歯で噛み切って開け、その煙草を人差し指と親指でつまんでふかした。女たちが、その前を通り過ぎると首は動かさずに目だけを移動させた。そのくせ、その女がカウンターで飲み物をオーダーすると、まるで甘いリキュールのような言葉を並べて、どこの席に座っているのかを尋ねるのだった。

女たちは大抵は体の線のはっきりと見てとれる薄いドレスを身につけて男たちを挑発した。ここでは、娼婦と堅気の女の区別が、ほとんどつかなかった。「ただの娼婦」が一番多かったかもしれなかった。そして、そのただの娼婦が一番魅力的な店だった。

シドニーは他の男のように舌なめずりこそしなかったが、あんなふうに気楽で思いやりにあふれていそうな女と一日じゅう抱き合っていたら、どんなに心地良いだろうと想像した。そして、そういう女を口説いている男の隣で、もしかしたら自分に気付いてくれるのではと、願いを込めて女を熱心に見詰めた。

しかし、女の方から彼に声をかける事は、めったになかった。彼は、伸びかけた無精ひげを撫でながら、自分の外見について考える。彼の顔は脂じみていて新しい紙幣のように、てかてかに光っていた。彼は新しい衣服で洒落ようという意気込みなど、とうに無くしていたので、いつもクロゼットの扉にかけられた古びた上着を羽織っていた。そのいくつかのポケットには、彼の外出に必要な腕時計や財布や鍵などが全部収まっていたので非常に便利だったのだ。それに彼は、もう長い間、香水をつける習慣をなくしていた。彼の体臭が好きだという女は、もう、とうにいなかった。二、三日前に塗りたくった脱臭剤は白く腋の下で固まり、そのせいでその臭いが人に危害を加える事はなかったが、小便をするために引き降ろしたジッパーの間からは、ひなびた臭いが漂った。そこに女の匂いが加わる事はめったになかった。安心感。そして彼は、悲しみとともに微笑する。彼女は今頃、どうしているだろう。

自分が週末の晩にはここに来て夜が明けるのを待つという習慣を、いったいいつから始めたのか、シドニーは思い返す。空の白む前に彼はここを出る勇気はない。ギャベジ缶を蹴とばして道路に転がりゴミを雪のように浴びるのが関の山だ。きっと通りすがりの幾人かは彼とゴミの区別がつかなくなり、隙間から漂う暖かい酒の息を認めて初めて人間の存在に気がつくだろう。

ここにいれば少なくとも彼は一個の人間だった。彼は少しの刺激で泣いてしまいそうに感じていた。たとえ彼が、このよれよれの上着のかわりにタキシードを着ていても、彼の気持は、いつも泣きそうなのだった。

彼はジンのおかわりをたのんだ。バーテンダーは常連である彼に少しも愛想良く接しなかった。そしてそのグラスを音を立ててシドニーの前に置いた。飲み物は少しこぼれて、出しっぱなしの一ドル紙幣にかかった。彼はどぎまぎしながら、その金を渡し、戻って来たつりを側にあった空のグラスに落として寄付をした。

隣の男はポン引きに違いない。五本の指の内の四本に、ごつくて悪趣味な指輪をはめている。あれに殴られたら、さぞかし沢山の血を流すだろう。そう思うと彼は視線を合わせないようにグラスを見詰めた。

自分は前からこんなに臆病だっただろうか。オレは決して貧乏ではない。仕事の後に一杯やる金の余裕もある。朝、シャワーを浴びて、プレスされたシャツを着て、ひげを剃れば決

して見映えがしない事もない。彼はひとつひとつ消去していった。何のために？

「ヘイ、ベイビー。具合はどうだい」

隣の男が女の腰に手をまわす。ベイビー！　なんていう甘い響きだろう。シドニーは気付く。自分に必要なのは、ベイビーというふわふわとした甘いものなのだ。甘く、しんみりと自分の体に溶けて行くせつない塊なのだ。

ラッパーはビートに合わせてがなりたてる。カウンターの隅にいた男は嘔吐して、店の従業員に追い出された。ここにいられるだけでも幸福じゃあないか。教会の前には浮浪者たちがダンボールの箱を並べて寝床を作っているだろう。暖かなベッド。彼らにしてみれば。オレの目には、ずらりと列をなした棺に見える。朝、教会で配られる朝食。熱いスープ。その時刻まで静かに続けられる観客のいない葬送。あいつらは死んでいる。オレは死にたくない。

シドニーは心臓を押さえる。あのあったかいものさえ手に入れればすむことなのに。あのやさしい塊をつぶれてしまうぐらいに抱きしめて、溜息の出所を唇で探し当てれば良いだけなのに。オレの体は、かつて全部が舌でできていた。もう味わえないってぐらいにあいつの体を堪能したものだ。その才能あふれた舌が硬直したあの日。それ以来オレは死にかけている。

彼は両手で顔を覆い呟く。まだ生きてるぞ。バーテンダーは、口のはしと鼻の穴を歪めながら彼の目の前にジンの代わりに氷水を置く。グラスの外側には、濡れた黒人の髪の毛が丸

まって一つ張りついている。

2

ネットが目覚めるといつもシーツは冷たい。ベッドから両足を降ろすと、綺麗に塗られた赤い爪が彼女の顔を照らす。昨夜も使い途のなかった可哀想な爪。彼女は常に足の爪たちを手入れしていた。とても無心に。

シーツの間からは良い匂いのタルクの粉がこぼれている。自分の肩に手をやると、その細かい粒子のために肌はすべすべに粉をふいている。私はベッドにいるときが一番魅力的だ。彼女はローブを羽織りコーヒーを沸かすために台所に行く。窓からは西日がさしている。五日ぶりにやって来た休日だった。

居間の寝椅子には夫が眠りこけていた。泥酔してそのまま寝込んだのだ。口を魚のように開けている。遠慮のない鼾とともに臭い息がのろしのように立ち上る。口のまわりには、刻みピクルスのかけらがこびりついている。夜明け前にキャブドライバーに混じってハンバーガーに齧りつく一人の酔っ払いが目に見えるようだった。彼はパンツを脱いでいたが、靴下を脱ぐのを忘れていた。酔い過ぎただるい体をベッドまで運びきれなかったらしい。いずれにせよ、この臭い息が、眠っている自分を起こさなかったのは幸運だったとネットは思う。

お湯が沸く。熱い湯気。このケトルから流れる水蒸気のように、昔、この男の吐く息は私の体を湿らせたのだ。開けた口からは唾液がこぼれている。この濃度のある液体がかつて自分の体に膜を作り、静かに体温を保存した事すらあったのだ。

ネットはコーヒーの粉をパーコレーターに移しながら、寝椅子で音をたてている物体に目をやった。台所のテーブル。愛し過ぎて歯ぎしりをしながら、その上で自分の体を犯させた情熱。彼女は彼をとりまく全ての物が憎かった。いつもマスタードを塗られていた心臓。彼の前でネットの全身は常に走り過ぎた心臓だった。そして、今それは永遠の休息を迎えたかのようだった。もう何も憎くない。寝入っている彼の首筋を見て噛みついて泣かせてやりたい。そんなふうにやるせない苛立ちを覚える事もない。

私は何かを失った。ネットは自分の爪先をこすり合わせる。この男は私の爪先がどんな色をしているかを知らない。もう長い間、口に入れていないから。手の爪と同じようにささくれだっていると思っている。

彼は寝返りをうち、鼾の音階を変える。ずい分前に、彼女は休息している彼の柔かな生き物を化粧に使う海綿のようにくしゃくしゃにして遊んだ。そして彼の寝息の変化を微笑しながら楽しんだ。まるで楽器。私がキーを変えてやる。彼女はいつも彼の体の隅々に意欲を持って臨んでいた。そして、誠意を持って彼の動きの邪魔をした。彼をものにするということ。結婚した後ですら、数年間も彼女はその事に心をくだいていた。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com